

『源氏物語』 小野の母尼考

— 〈母〉として残存する意義—

水谷 奈由

一 母尼の登場

『源氏物語』終末に近い「手習」巻に、物語中最も高齡の女性が登場する。

そのころ横川よかはに、なにかし僧都そうづとかいひて、いと尊き人住みけり。(1)八十やそぢあまりの母、五十いそぢばかりの妹いもうとありけり。(2)

⑥ 「手習」二七九頁¹

それは、横川に住む高德な僧都の母であり、その年齢は八十余歳とされる。四十歳で算賀の祝宴が催された当時において、この高齡はことさら際立っているといえよう。

古くわんき願ありて、初はつせ瀬に詣まうでたりけり。……事ども多くして帰る道に、奈良坂ならさかといふ山越やまこえけるほどより、この(3)母の尼君心地あしうしければ、……横川に消息したり。

⑥ 「手習」二七九頁

そして、この高齢の母はすでに出家していたのであった。この母尼は初瀬に参詣し、その帰途に病臥してしまうのであるが、修行のため山籠もりをしていた横川の僧都が、その消息をうけて速やかに下山することになる。高德の僧が母を見舞うために下山するという構想は、『河海抄』⁽²⁾が指摘するように、恵心僧都源信の故事を想起させるものである。

源信と母尼君との逸話については、『今昔物語集』⁽³⁾にも見る事ができる。籠山していた源信は虫の知らせで下山し、母尼君の最期を看取るのであるが、母尼君は源信の勧めで念仏を唱えたことにより、往生を遂げることになる。

これに対して、この高齢の母尼は、往生を遂げるどころか僧都の念仏によって命をとり留め、物語に残存してしまうのである。これについて外山敦子は「手習巻の母尼の役割、物語のなかでの固有の機能は、その冒頭部分よりもむしろモデル（水谷注・今昔説話）からずれていった後の物語展開から読み取るべきではなからうか」として、命長らえたのちの母尼の役割に着目している。この見解に導かれながら、母尼の言動に関して、改めて詳細に検討していきたい。

母尼の子は、冒頭で語られた二人だけではなかった。

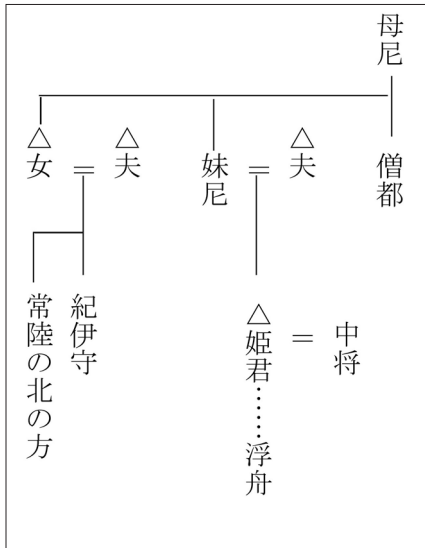
おほあまぎみ
大尼君の（4①）孫の紀伊守なりけるが、このころ上りて来たり。三十ばかりにて、容貌きよげに誇りかなるさまし
たり。「何ごとか、去年一昨年」など問ふに、ほけほけしきさまなれば、こなたに来て、「いとこよなくこそひがみた
まひにけれ。あはれにもはべるかな。残りなき御さまを、見たてまつること難くて、遠きほどに年月を過ぐしはべるよ。
（5）親たちものしたまはで後は、一ところをこそ御かはりに思ひきこえはべりつれ。（4②）常陸の北の方は、おと
づれきこえたまふや」と言ふは、いもうとなるべし。

（6）「手習」三五六―三五七頁

母尼には僧都と娘（妹尼）のほかにも、性別は不詳だが子（紀伊守の父または母、おそらく母）がおり、そして孫（紀伊守、常陸の北の方）まで存在したのである。

ここまで、母尼の周辺に関して知りうる概要は、以下のようなになる。

- (1) 八十歳余りである。
- (2) 横川の「なにがし僧都」と「五十ばかりの妹」の母である。
- (3) 尼である。
- (4) 三十歳ほどの紀伊守とその妹（常陸の北の方）との祖母である。
- (5) 紀伊守の親は既に亡くなっており、代わって小野の母尼が養育をした。



△はすでに死亡。
…は形代。

すでに出家を遂げた高齡の女性でありながら、実の子である横川の僧都とその妹との関係のみならず、孫に当たる紀伊守とその妹との関係を重ねることによって、二つの世代にわたって「母」として設定されているのが、小野の母尼なのであった。「高齡」の「尼」にとどまらない、「母」としての造型の意味を探っていきたい。

二 子の有無―源典侍と弁の尼との比較から―

まず、「高齡」の「尼」という点に着目する。物語には、母尼に次ぐ高齡の尼が二人登場する。源典侍と弁の尼である。この二者と母尼とを比較することにより、母尼の特異性を導きたい。

源典侍は、桐壺帝時代の典侍である。

年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく心ばせありて、あてにおほえ高きはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるまで、などさしも乱るらむといぶかしくおほえたまひければ、戯れ言いひふれてこころみたまふに、似げなくも思はざりける。

(①「紅葉賀」三三六頁)

源典侍は身分が高く、品格も備えているが、ひどく好色な者として登場する。登場から年配者と語られ、その年齢は「五十七八」(①「紅葉賀」三四三頁)歳なのであった。源典侍は高齡にもかかわらず、物語に再度登場する。

源典侍といひし人は、尼になりて、この宮(水谷注・女五の宮)の御弟子にてなむ行ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知りたまはざりつるを、あさましうなりぬ。

(②「朝顔」四八三頁)

源典侍は「朝顔」巻に登場した際、すでに出家していた。女五の宮の仏弟子になっていたのである。光源氏は以下のような感慨を催す。

この盛りにいどみたまひし女御、更衣、あるはひたすら亡くなりたまひ、あるはかひなくてはかなき世にさすらへたまふもあべかめり、入道の宮などの御齡よ、あさましとのみ思さるる世に、年のほど身の残り少なげさに、心ばへなども、ものはかなく見えし人の生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なり、
と思すに……。

②「朝顔」四八四頁

源典侍の老耄の姿が、若くして逝去した数多の女御や更衣、さらには藤壺を想起させるというのだ。長命を保つ源典侍は、短命であった女たちと比較され、「定めなき世」を源氏に慨嘆させているのであった。

もう一人の高齢の出家者である弁の尼は、「六十にすこし足らぬほど」(⑤「橋姫」一五九頁)とされ、薫に昔語りをし、薫の実父が柏木であると知らしめることとなる人物である。自らの身の上に関して、以下のように薫に語る。

「むなしうなりたまひし騒ぎに、母にはべりし人は、やがて病づきてほども終ず隠ればべりにしかば、いとど思うたまへ沈み、藤衣裁ち重ね、悲しきことを思ひたまへしほどに、年ごろよからぬ人の心をつけたりけるが、人をはかりこちて、西の海のはてまでとりもてまかりにしかば、京のことさへ跡絶えて、その人もかしこにて亡せはべりにし後、十年あまりにてなん、あらぬ世の心地してまかり上りたりしを、この宮は、父方につけて、童より参り通ふゆゑはべりしかば、今は、かう、世にまじらふべきさまにもはべらぬを、冷泉院の女御殿の御方などこそは、昔聞き馴れたて

まつりしわたりにて、参り寄るべくはべりしかど、はしたなくおぼえはべりて、えさし出ではべらで、深山みやま隠れの朽くち木きになりにてはべるなり。……」……。

(5) 「橋姫」一六一〜一六二頁

弁は、柏木の死後、その乳母であつた母も亡くなり、喪に服していたが、長年言い寄つてきた、それほどの身分でもない男にだまされて九州まで下る。しかし、その男とも死別し、十年ほど経つた後上京して、源氏の異母弟である八の宮家に出仕した。弁の父は、八の宮の北の方の母方の伯父であり、童のころから八の宮家に入入りしていたという。弁の尼には子がいないものの、八の宮の召人であつたとする論がある(この点は後に詳しく述べることにする)。

そして、大君の死後に尼姿が語られた後、弁自身が「厭いとふにはえて延びはべる命のつらく、またいかにせよとて、うち棄すてさせたまひけんと恨めしく、なべての世を、思ひたまへ沈むに、罪もいかに深くはべらむ」(5) 「早蕨」三五八頁)と述べ、大君が若くして逝去したにもかかわらず、弁自身は長命であるため、老少不定の世を嘆くのであつた。

このように、源典侍および弁の尼は、高齢という設定のみならず、若くして生涯を終えた女たちを想起させる点で共通する。これは、小野の母尼も共通するところである。

いかなる所に、かかる人、いかで籠こごりゐたらむ、定めなき世ぞ、これにつけてあはれなる。(6) 「手習」三二九頁)

孫娘が短命であつたのに対し、母尼は八十余歳という長寿である。ゆえに、母尼は孫娘の婿であつた中将により、「定めなき世ぞ」と慨嘆されている。これは、三人の老尼に共通する点なのであつた。

しかしながら、子の有無という観点では相違が見られる。源典侍、弁の尼ともに「母」となる可能性は持っていたが、三人の中で子を有しているのは小野の母尼のみであり、源典侍と弁の尼とは、子を授かることなく物語から姿を消すので

ある。母尼と他の二人では、どのような違いが認められるだろうか。それぞれの出家後の語り（語られ方）に着目し、それらを比較することによって相違を明らかにしてみたい。

源典侍の尼姿は、最後の登場場面である「朝顔」巻で描かれ、このとき推定七十もしくは七十一歳であり、小野の母尼に次ぐ高齢の者として目を引く。桃園の宮（故桐壺院の弟）の娘である朝顔の姫君に恋慕する源氏が、女五の宮（故桐壺院の妹）の見舞いに託けて桃園の宮邸を訪れた際、そこにいた老女に呼び止められる。それは、尼となった源典侍なのであった。源氏が宮邸にいる老女を源典侍だと認識したのは、彼女の発言からであった。

「かしこけれど、聞こしめしたらむと頼みきこえさするを、世にあるものとも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」……。

②「朝顔」四八三頁

源典侍は、以前故桐壺院に「祖母殿」と称されていたことを源氏に想起させ、「母的なイメージが付与され」るのである。源典侍の昔語りが、源氏にとつては『うれしき御声』（同）と受けとめられ、懐古する契機となっている。そして、源典侍は、源氏に以下のように見なされている。

いとど昔思ひ出でつつ、古りがたくなまめかしきさまにもてなして、いたうすげみにたる口つき思ひやらるる声づかひの、さすがに舌つきにてうち戯れむとはなほ思へり。「言ひこしほどに」など聞こえかかるまばゆさよ、今しも来たる老のやうになど、ほほ笑まれたまふものから、ひきかへ、これもあはれなり。……入道の宮などの御齢よ、あさましとのみ思さるる世に、年のほど身の残り少なげさに、心ばへなども、ものはかなく見えし人の生きとまりて、の

どやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なり、と思すに、ものあはれなる御気色けしきを、心ときめきに思ひて若やぐ。

(②「朝顔」四八三〜四八四頁)

源典侍は、老醜が晒されたとしても、源氏にとっては「なまめかしきさま」が見て取られ、また「あはれなり」と思う対象でもあるのだ。老耄の姿(傍線部)が語られた後には、必ず逆接の語(囲み線部)が用いられ、老いた姿よりも、それに似合わぬ妖艶なさまが強調されているのである(波線部)。それだけではなく、源典侍は、源氏が過去を回想して慨嘆する様子を見て、源氏が未だに自分に対する恋情を捨ててはいないと思ひ、さらに「若やぐ」のであった。彼女は出家してもなお、源氏や語り手によって〈女〉として見られ、源典侍自身も未だ〈女〉としての自覚があるのである。続いて、弁の尼はどのようなであったか。出家後の弁は、以下のように語られる。

かたちも変へてけるを、強ひて召し出でて、いとあはれと見たまふ。……いたくねびにたれど、昔、きよげなりけるなごりをそぎ棄てたれば、額ひたいのほどさま変れるにすこし若くなりて、さる方にみやびかなり。

(⑤「早蕨」三五八頁〜三五九頁)

尼姿となる弁であったが、薫は「いとあはれ」、「みやびやか」と見る。また、髪を削いだことが、かえって若くみせるという。弁も源典侍同様、年齢を重ねてはいるものの、出家した後の姿は、むしろ若返ったように見られるのである。

弁は尼姿になった後も、薫への昔語りを続ける。八の宮の娘である中の君から異母妹(浮舟)の存在を聞いた薫は、すぐさま弁の尼のもとを訪ねる。

宇治の宮を久しく見たまはぬ時は、いと昔遠くなる心地して、すずろに心細ければ、九月二十余日ばかりにおはしたり。……弁の尼召し出でたれば、障子口に、青鈍の几帳さし出でて参れり。「いとかしけれど、ましていと恐ろしげにはべれば、つつましくてなむ」とまほには出で来ず。

⑤「宿木」四五三〜四五四頁

薫の呼び出しに、弁の尼は老残の身を憚り、姿をはつきりとは見せない。しかし、薫が異母妹について尋ねると、弁の尼は饒舌に話し始める。

さて、ものついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり。「京に、このごろはべらんとはえ知りはべらず。人づてにうけたまはりしことの筋ななり。故宮の、まだかかる山里住みもしたまはず、故北の方の亡せたまへりけるほど近かりけるころ、中将の君とてさぶらひける上臈の、心ばせなどもけしうはあらざりけるを、いと忍びてはかなさほどにもものたまはせけるを、知る人もはべらざりけるに、女子をなん産みてはべりけるを、さもやあらんと思すことありけるからに、あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて、またとも御覧じ入ることもなかりけり。……かの君の年は、二十ばかりにはなりたまひぬらんかし。いとうつくしく生ひ出でたまふがかなしきなどこそ、中ごろは、文にさへ書きつづけてはべりめりしか」と聞こゆ。

⑤「宿木」四五九〜四六〇頁

弁の尼は、浮舟やその母親のことまでも、詳細に述べる。ここまで話されれば、薫が「さらば、まことにてもあらんかし、見ばや」⑤「宿木」四六一頁」という気になるのも当然である。なぜこれほどまで詳細に語るのか。それは、弁の尼が八の宮の召人であった可能性から推察しうる。外山は、弁の尼が八の宮の召人であったと断言し、「実母も乳母も不在の姉妹にとつて、実母の血縁に当り、またかつて八の宮の召人でもあった後見役の実質とは、〈母〉に最も近い役割を担う存在」

であったとする。加えて以下のようにも述べる。⁽⁹⁾

浮舟はあくまでも大君の形代でしかないが、それを期待したのは薫だけではない。(八の宮の姫君)の後見役を自認する弁の尼にとっても、浮舟は大君の身代わりであることが要求されているのだ。……しかし、大君とは違い、現実の浮舟には実母も乳母も存在する。それゆえに、まずは浮舟を(母)たちから遠ざけねばならなかった。三条の小家で(母)たちを強引に退け排除していった弁の尼の高圧的な態度は、一見薫の意に従った行動であるかのようであり、実は浮舟を(母)から奪い、自分自身が再び(母代)の後見役に復するための計算された行為であったのだ。

弁の尼は、大君の死後に出家し、「ゆゆしき身」(⑤「宿木」四五八頁、⑥「浮舟」一六五頁、⑦「蜻蛉」二三七頁)と憚りはするが、薫への昔語りは尽きない。異母妹の存在を薫に話す際にも、薫に聞かれたために応答するという体裁だが、語り出す内容はあまりに具体的であり、まるで昔から見知っていたかのような話しぶりなのである。外山の見解は十分に首肯できるものである。薫の要請に答えているようでありながら、(母代)となることが弁の言動の真意なのであった。だが、弁の、実母を退けようとする発言が浮舟を入水に追い込むことに繋がってしまい、浮舟の(母代)^{ははろ}となる思惑は失敗に終わる。結局のところ弁は、(母)には成り得なかったのだ。

源典侍と弁の尼とは、両者ともに、その昔語りが周辺人物に往事を懐古させる。また、老筆した姿が語られるものの、女性として見られることには変わりない。出家後にはむしろ若返るようだとまで語られるのである。かつて源典侍は天皇の信頼を得て、外部との仲立ちをする重要な役割を担う女官だったのであり、弁は宇治姉妹の後見役を任せられていたのだった。出仕の段階では、子をなさないことが立場を保証したのである。しかし、後見する者が死を迎えると、(女)を捨てることができることなく、尼となる他なかったのだ。二者は、最後まで(女)として見られ、(母)には成り得ない者として存在し

たのである。

一方で、母尼は「ここかしこうちしはぶき、あさましきわななき声にて、なかなか昔のことなどもかけて言はず。」(⑥「手習」三一九頁)とあるように、咳や震え声など、老醜を晒すばかりであり、昔語りもしない。また、「咳が絶え」(⑥「手習」三二〇頁)ない様子を見て、周囲の人々は「見苦し」(同)いとまで思っている。前者の二人のような女性らしさが語られることはなく、まして若やくことは微塵もないのだ。母尼は〈尼〉であることに加え、もう一方では〈母〉でもある。子どもの存在により、〈女〉とは切り離された〈母〉と見られるのである。〈尼〉であり、〈母〉でもある者は、〈女〉の延長にあるのではなく、〈女性〉性から切り離された存在だと言えるのではないだろうか。

では、〈女性〉性を越えた〈母〉という観点は、どのように物語に関与しているのだろうか。

三 山麓に住まう母尼

母尼が住まうのは、女人禁制の色濃い、比叡の麓なのであった。〈女性〉性を捨てた存在であるとはいえ、女人禁制の対象にはならなかったのであろうか。仏教説話から探ってみたい。

『日本往生極楽記』には以下のように記載がある。¹⁰⁾

尼某甲は、大僧都寛忠の同産の姉なり。一生寡婦にして終にもて入道しぬ。僧都寺の辺に相迎へて、晨昏に養育しけり。尼衰暮に及びて、ただ弥陀を念じたり。僧都に語りて曰く、明後日に極楽に詣るべし。この間不断念仏を修せむと欲ふといへり。僧都衆僧をして三ヶ日夜、念仏三昧を修せしむ。重ねて僧都に語りて曰はく、西方より宝の輿飛び来りて眼前にあり。ただし仏、菩薩は濁穢あるをもて帰り去りぬといへり。言涙と俱にす。僧都をして風誦を修せしむる

こと両度なり。明くる日尼の曰く、聖衆重ねて来りぬ。往生の時至るといへり。凡に隠りて坐し、念仏して入滅せり。こと同様に、『大日本国法華験記』巻下第百廿においては、「大日寺の近き辺の老いたる女」に関する記述がある。^①

一の女人あり。姓名いまだ詳ならず。身貧しく年老いて、大日寺の辺にして寄居せり。両の男子あり、天台の僧となりて、兄をば禪静と曰ひ、弟をば延叡と曰ふ。その母病を受けて、日を経て悩乱し、即ちもて入滅せり。二の僧一心堅固に、昼は法華経を読み、夜は弥陀仏を念じて、偏に慈母の極樂に往生せむことを祈る。この時に当りてや、大日寺の住僧広道夢みらく、極樂・貞観の両の寺の間に音楽を聞けり。驚きてその方を望むに、三の宝車あり。数千の僧侶、香炉を捧げて圍繞し、直に老いたる女が住める宅に到れり。老いたる女天衣を着て、宝冠・瓔珞、その身を莊嚴し、宝車に乗りて欣びて往還す。便ち二の僧に勅ひて曰く、汝母のために懇志ありて、法華を誦誦し、念仏を勤修して、菩提を成さむことを祈る。これをもて来迎するなりといふ。宝車西の方を指して遙に去るとみたり。同じ夢の中に、広道聖人往生の相あり。広道幾の年を歴ずして入滅せり。この日音楽空に満ちぬ。道俗耳を傾けて、随喜讚歎し、道心を発す者多し。

『法華験記』に登場している老女は二人の僧の母であり、年老いてからは「大日寺辺」りに身を寄せたとある。そして、僧である息子が経を誦誦したことにより、母は往生を遂げたのである。

二つの例から、僧を身内に持つ女は寺周辺に住まい、勤行して死期を待つ事があったことが確かめられる。さらに、僧の母や姉妹が「入滅」した、とされることに着目したい。「入滅」とは、涅槃に入ること指す仏語であり、特に釈迦や高

僧などの死に用いる語である。¹²⁾なぜ釈迦などと同等に扱われているのか。ここで、勝浦令子が興味深い指摘をしている。¹³⁾

十世紀の後半頃には、僧や文人貴族のあいだで僧の母が理想化されていくようになり、とくに高僧の母のために法会を催すことが流行し、次第に民衆の中でも僧とその母のありかたが理想化されていった。このようなことを背景に、僧伝に母の記載が加わっていったと考えられる。

しかしこの僧による母の理想化は、その背景として女性忌避が展開されていくことと密接なかかわりがあった。仏教から忌避される女性である母を、宗教的に救済することでもあった。つまり女性忌避の裏面として母性崇拜が象徴されていたともいえる。そして一方で、母自身も次第に仏教の女性忌避の思想を受け入れ、僧である息子に自らの往生・成仏を頼むことによつて、宗教的に救済されることを信じるようになっていったと考えられる。

勝浦によれば、高僧の母は女性忌避から逃れ、母性崇拜の対象であったという。また、高僧の母は山麓に住まうだけでなく、高僧の息子に看取られて往生を望んだとされる。往生のために高僧を頼るとまで言えるかは疑問だが、『日本極楽往生記』や『法華験記』に見られるように、僧の周辺の寺に住まい、念仏を唱える女たちは間違いなく往生を願う者であっただろう。

小野の母尼は、横川の僧都という高僧の母親であり、とりわけ高齢の老尼でもある。仏教説話にみる〈母〉として、崇拜される対象とされたのではないか。すなわち、小野の母尼の存在性の根源としては、〈母〉という属性が最も重要なのである。

これまで母尼は、〈母〉という観点から外され、特異な年齢および老残の姿から論じられてきた。永井和子は、「老いを迎えること、長寿を得ることが極めてむづかしかつた当時において、老いは力であり得たわけで、母尼君の強い生命力は、

同時に浮舟を生かす力となつて浮舟の中に注ぎ込まれた」と述べていた⁽¹⁴⁾。また、外山は戸令の引用により、「生活上「侍」を必要とされる八十歳以上の老人は、単に「生産能力がない」あるいは「生産とは無関係」というだけでなく、もはや一人では人間としての生活も送れないと見なされた存在なのであり、社会的には〈人間〉の範疇からはずれた存在として線引きされているのである」とする⁽¹⁵⁾。さらに、小林とし子は「惚けた媪とは、人間でありながらどこか人間を越えたものを感じさせ、さらに畏怖を感じさせるものであり、カミに近いものと見做されたのではないか」と言う⁽¹⁶⁾。

しかし、例えば成尋阿闍梨母は、息子の成尋が入宋したことによる別離の悲しみを、八十余歳で『成尋阿闍梨母集』にしたためている。一概に八十歳が人間を越えた存在とは言えまい。これまで老人という属性にばかり目が向けられてきたが、果たして、母尼はその高齢の姿だけを捉えてよいものか。母尼に関する呼称は全一六例あるが、そのうち「老人」と呼称されるのはわずか四例に留まる。一方で、「母」と呼称されるのは九例で、最も多いのである。ゆえに〈母〉としての設定を見逃してはならないだろう。

では、小野の母尼は、〈母〉としてどのように機能しているのだろうか。

四 母尼の言動の意図

次の引用は、中将が、身分のわからぬ拾い娘（浮舟）のもとを訪ねて笛を奏で、それを聞きつけた母尼が登場する場面である（括弧は水谷注）。

大尼君、笛の音をほのかに聞きつけたりければ、さすがにめでで出で来たり。……いと弾かまほしと思ひたれば、（中将ハ）いと忍びやかにうち笑ひて、「……今宵聞きはべらばや。」とすかせば、（母尼ハ）いとよしと思ひて、……取り

寄せて、ただ今の笛の音をもたづねず、ただおのが心をやりて、あづまの調べを爪さはやかに調ぶ。……（中将）「いとをかしよう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ」とほむれば、（母尼ハ）耳ほのほのしく、かたはらなる人の問ひ聞きて、「今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。ここに月ごろものしたまふめる姫君、容貌はかたちいときよらにもものしたまふれど、もはら、かかるあだわぎなどしたまはず、埋もれてなんものしたまふめる」と、われ賢かしにうちあざ笑ひて語るを、尼君などはかたはらいたしと思す。これに事みなさめて帰りたまふほど、山おろし吹きて、聞こえ来る笛の音をいとをかしよう聞こえて、起き明かしたる。

⑥「手習」三一八―三二一頁

母尼は中将の弾く笛の音を聞きつけ、にじり出てくる。そして、中将に琴の演奏を勧められ、「あづまの調べ」を好き勝手に演奏するのであった。妹尼は、その様子に「かたはらいたし」と思い、中将もまた、興ざめて帰ってしまう。

この母尼の言動にはどのような意図があるか。引用部の直前では、浮舟のあまりにそつけない態度に嫌気を起こした中将が退出しようとしていた（⑥「手習」三一八頁）。それに対して妹尼は、浮舟の代詠までして中将を思い留まらせようとする（⑥「手習」三一八頁）。そうしたやり取りのなか、母尼が登場するのだ。中将は母尼と言葉を交わし、その場に留まることとなるのである。したがって、母尼は、中将を引き止めようとする娘の尼君に尽力したと言えるのではないだろうか。最終的に、中将は興ざめて帰りはするものの、母尼の登場により、退出の理由が塗り替えられた。中将は、浮舟に対する不満からではなく、母尼への疎ましさから退出するのである。さらに、母尼は傍線部のように語り（＝騙り）、浮舟が出て来ないのは、無駄なことをせず引きこもっているためであって、中将を全く寄せ付けまいとしているのではないと弁護するのだ。それゆえ、中将は浮舟への求婚を諦めず、早くも翌朝には、気を取り直して和歌を送って来させるのである。すなわち、母尼の言動は、娘の尼君が中将に疎まれぬよう、進んで罪を被る行為であったのだ。

では、次の場面ではどうだろうか。

姫君は、いとむつかしとのみ聞く老人おいびとのあたりにうつぶし臥ふして、寝いも寝ねられず。宵よひまどひは、えもいはずおどろおどろしいびきしつ、前にも、うちすがひたる尼ふたりども二人臥ふして、劣ふらじといびきあはせたり。いと恐ろしう、今宵こよひこの人々にや食くはれなと思ふも、惜あはしからぬ身なれど、例の心弱こゝろさは、一つ橋危はしあやうかりて帰り来たりけん者のやうに、わびしくおぼゆ。……夜半よなかばかりにやなりぬらんと思ふほどに、尼君にきみしはぶきおほほれて起きにたり。灯影ほかげに、頭かしらつきはいと白しろきに、黒くろきものをかづきて、この君の臥ふしたまへるをあやしがりて、鼬いたちとかいふなるものがさるわざする、額ひたいに手を当あてて、「あやし。これは誰たれぞ」と執念しつねげなる声にて見おこせたる、さらに、ただ今食くひてむとするぞおぼゆる。鬼おにのとりもて来けんほどは、ものおほえざりければ、なかなか心やすし、いかさまにせんとおぼゆるむつかしさにも、いみじきさまにて生き返り、人になりて、また、ありしいろいろのうきことを思ひ乱れ、むつかしとも恐ろしとも、ものを思ふよ、死なましかば、これよりも恐ろしげなるものの中にこそはあらましか、と思ひやらる。

⑥「手習」三二九—三三〇頁

浮舟は妹尼不在の夜、通つてきた中將から逃れようと母尼の寢床へ駆け込む。しかし、母尼の様子は異様なもので、傍にいるのも恐ろしいものであった。さらに、「ただ今食くひてむとする」ようにさえ見えるという。老いた傭よが鬼おににまじるといふ伝承は、『今昔物語集』にも収められている⁽¹⁸⁾。浮舟は、小野で意識が回復した折、「一人見し人の顔はなくて、みな老法師、ゆがみおとろへたる者どものみ多かれば、知らぬ国に來にける心地していと悲し」(⑥「手習」二九五頁)と思つていた。浮舟にとつて小野の地は、不気味で古めかしく感じられたのだろう。その状況も相まって、母尼から鬼を連想したと考えられる。

だが、母尼は本当に奇怪な存在として登場したのだろうか。母尼の発言に着目すると、「鼬」という語がある。この語は

以前、浮舟の実母である中将の君が中の君と語らう際に述べていた。

「あやししく心幼げなる人を参らせおきて、うしろやすくは頼みきこえさせながら、颯いさのはべらむやうなる心地のしはべれば、よからぬものどもに、憎み恨みられはべる」と聞こゆ。「いとさ言ふばかりの幼げさにはあらざめるを。うしろめたげに気色けしきばみたる御まかけこそわづらはしけれ」とて笑ひたまへる……。

(6) 「東屋」七五頁)

中将の君は、中の君に浮舟の世話を依託するが、浮舟の幼さから安心できず、自身は「颯」のような心地だとする。

「手習」巻においても、母尼は「颯とかいふなるものがさるわざする」と表されている。母尼は中将の君と重なり、浮舟に母親を思い起こさせる契機となっているのだ。葛錦正一は、「母尼と中将は対極的」な存在だと述べるが、むしろ浮舟には中将の君が重なって見えたのではないか。母中将の君から絶縁を言い渡され、死を選んだ浮舟であったが、今一度母を想起したことで、恐怖の死よりも、尼となり生きることを選び取った。いや、母尼が選ばせたのである。母尼は、母代たろうとする娘の尼君よりも母代として機能し、浮舟の生に深く関与したのだった。

なぜ母尼は、祖母ほど年の隔たりがありながら、浮舟の母代となるのか。祖母が接近することで、どのような効果をもたらすのか。

そもそも子は入内や政権争いのために利用される存在であった。桐壺更衣の父や頭中将など、子を入内させようと目論む人物は数多く存在する。男は政権のための子欲していたのだった。女はその子を産むための存在に過ぎなかったのである。当然女は〈母〉である前に夫の〈妻〉なのであり、夫がいる以上、〈女〉を捨てきれない存在なのだ。

では、祖母であればいかがであろう。祖母で、とりわけ高齢である者は生殖機能を失い、〈女〉としての性質を欠いている。夫が他界していれば尚更である。祖母が養育する例は、日本昔話においても存在する。なぜ父母ではなく、老人たちが登

場し、養育しなければならなかったか。松井友は、祖父母とは、子の自立を妨げようとする鬼婆や天狗のような利己的な存在とは異なり、善良で良い夫婦像であるとともに、子どもの自立に際しての父性と母性の理想の姿だとする。⁽²⁰⁾若き子らと年齢が隔たる祖父母であるが、善良な父母として存在しているというのだ。

『源氏物語』に登場する老尼の中で、娘を亡くした祖母は他に北山の尼君や大宮が挙げられる。またこの両者は、孫娘を養育する存在でもある。北山の尼君は、「北山」という辺鄙な地にて、娘の遺児である紫の上の養育をした。その際、孫娘が年相応でないことは嘆くものの、自らは男を接近させず、孫娘の成長を見護った。大宮は、娘である葵の上の死後、夕霧と雲居雁とを養育した。雲居雁に関しては、中将が引き取るまで三条宮にて預かる。また、中将が雲居雁の入内を目論む一方で、大宮は雲居雁の、夕霧への恋慕を見逃すのだった。

祖母尼たちは社会的なしがらみから逃れた存在だと言えよう。その祖母が孫を養育するのは、結婚や決められた生き方には囚われず、将来を選び取らせることを意味する。すなわち〈女〉性からの解放である。

小野の母尼についても同様である。小野に住まう尼たちが、浮舟と中将とを縁付かせるために、みな浮舟の出家願望を受け付けなかったにもかかわらず、出家の意を僧都に打ち明けたのは、この母尼なのであった(⑥「手習」三三四頁)。一方、浮舟の母代たろうとした娘の尼君は、出家こそしても亡き娘代わりを欲し、浮舟に執着する。さらには、浮舟と娘婿であった中将との仲を取り持とうとし、浮舟は困窮させられる。娘の尼君は、自身の慰めという欲望ゆえに、母娘の再構築を願うのであった。その点、母尼は「朽尼」(⑥「夢浮橋」三七四頁)であり、性を越えた存在である。祖母が母代となることによって、浮舟は身分や〈女性〉性から解放されるのであった。ゆえに、母尼は、娘の尼君よりも〈母〉代として、浮舟に接するのである。

母尼は浮舟を出家に導いただけではない。母尼が最後に姿を現す場面では、孫の紀伊守が小野の地に訪れたのであった。浮舟は、紀伊守から発せられた「常陸」という、親と同じ呼び名を聞き、思わず傾聴する。ここに登場する「常陸」は、

浮舟に親との関係を想起させる役割があると言える。しかし、それだけに終始せず、その名が、紀伊守とともに登場したことに意図があるのではないか。

紀伊守と常陸守とが同時に登場するのは、「手習」巻のみではない。「帚木」巻から「関屋」巻までに及び、空蟬をめぐって登場する夫常陸介（「関屋」巻に登場するまでは「伊予介」と、その子紀伊守も存在した。紀伊守は、常陸介の後妻である空蟬に「すき心」①「帚木」一〇五頁）を抱く。紀伊守も光源氏のように、母代への恋慕の情を抱いているのである。そして、常陸介に關しては、伊勢光が宇治十帖に登場する常陸介（中将の君の夫、浮舟の継父）とも関連させて、「別生き方が見えた女（妻）」に、つたない身の宿世を体感させる存在として、彼ら受領がいる」と述べる⁽²⁾。空蟬にしても、中将の君にしても、もともとは上流貴族であったにもかかわらず、受領の夫と縁づいたことよって身を憚るのであった。⁽³⁾

「手習」巻での紀伊守、常陸の存在はどうであろうか。紀伊守は母尼を親の「御かはり」⑥「手習」三五六頁）として慕い、小野を訪れるのであった。そして、常陸の名が同時に語られたことにより、居合わせた浮舟は都の薫や母を想起しただけでなく、もはや自身が卑しい存在であると自覚し、「なかなか言ふかひなきさまを見え聞こえたてまつらむは、なほ、いとつつましくぞありける」⑥「手習」三六〇頁）と身を憚るのであった。受領よりも格段に高貴な身分であった浮舟が今や尼となり、もはや都人に認知されることすら憚る、つたない身となったのである。浮舟はこの自覚によって、都との完全なる決別を選択したのであった。浮舟に身の卑賤さを自覚せしめた紀伊守、常陸の存在は、小野の母尼が残存していたからこそ、導かれて登場したのであった。母尼が最後まで（母）として存在し続けたことよって、浮舟は世間の煩わしさから解放されることとなったのである。

五 小野の母尼の存在意義

母尼は、源信を彷彿とさせる僧都の母として登場した。源信の説話では、往生を遂げ、消えゆく存在であったのに対し、「手習」巻では、小野の地にて〈母〉として生き続ける存在となっている。これまで考えられてきた母尼像は、「八十」余りという年齢から、人間を超越した者という見做され方であった。しかしながら、僧都の〈母〉として登場し、〈母〉と呼称されることも多いことから、やはり〈母〉として存在することに意味がある。

源典侍や弁の尼も同様に出家した身であるが、最後まで女として生きた。それに対し、母尼は女と切り離された（性の対象とならない）〈母〉なのであった。『日本往生極楽記』などの仏教説話において、高僧の母が尊重されたように、母尼は最も理想的な母として登場しているのである。

そして、母尼は実の娘（妹尼）だけでなく、浮舟にも関与する。母尼は浮舟に対し、実母を思い起こさせる人物としても作用するのである。母尼は浮舟を出家に追い込んだのではなく、生きる道を促したのだ。

女は〈妻〉となり〈母〉となるが、〈母〉となるのは政権利用の子を産み、育てることによる。しかし、それは男の支配下に置かれていることを意味し、〈母〉というよりもむしろ〈妻〉としての存在に重きが置かれたのであった。出家した〈祖母〉ともなれば、生殖機能を失い、〈女〉性から解放される。その祖母尼が、今後成長する孫娘を養育するのは、孫娘もまた〈女〉性から解放し、自由に生きることを促す行為である。小野の母尼もまた同様であり、浮舟を出家に導き、疎ましい世間から逃れさせる存在なのであった。

- (1) 『源氏物語』の本文引用は、〈新編日本古典文学全集』『源氏物語』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳、小学館、一九九四～一九九八年)による。引用の際には、(分冊数「巻名」頁数)を記す。
- (2) 山本利達・石田讓二校訂 玉川琢彌編『紫明抄 河海抄』(角川書店/一九六八年六月)。
- (3) 「源信僧都母尼往生語第三十九」(馬淵和夫・国東文磨・稲垣泰一校注・訳『新編日本古典文学全集36 今昔物語集②』(全四冊)『小学館/二〇〇〇年五月)。
- (4) 外山敦子「八十あまり」の小野の母尼——『源氏物語』の終焉』(『源氏物語の老女房』(新典社/二〇〇五年一〇月)。
- (5) 神田龍身「社会の欲望の媒介装置Ⅱ浮舟——交換される欲望」(『源氏物語Ⅱ性の迷宮へ』(講談社/二〇〇二年)および外山敦子「弁の尼と中将の君——〈母〉たちの浮舟物語——」(『源氏物語の老女房』(新典社/二〇〇五年一〇月)による。さらに二人の考えを継いで、三村友希「男のことは・女のことは——「二心」なき男と「数」ならぬ身の女——」(助川幸逸郎・立石和弘・土方洋一・松岡智之編『新時代への源氏学』五「構築される社会・ゆらぐ言葉」(竹林舎/二〇一五年五月)も首肯している。
- (6) 源典侍は「紅葉賀」巻で「五十七八の人」(①「紅葉賀」三四三頁)と語られているため、「朝顔」巻では、七十歳か、七十一歳と推定できる。
- (7) 千野裕子「源典侍と弁の尼——亡き父へとつながる〈昔語り〉の女房」(源氏物語を読む会編『源氏物語〈読み〉の交響』(新典社/二〇一四年九月)。
- (8) 外山敦子「浮舟をめぐる〈母〉たち——弁の尼と中将の君——」(久保朝孝・外山敦子編『端役で光る源氏物語』(世界思想社/二〇〇九年一月)。
- (9) (8)に同じ。
- (10) 仏書刊行会編纂〈大日本仏教全書』『第一〇七冊 日本往生極楽記外十二部』(名著普及会/一九七九年八月)、井上光貞・大曾根章介校注〈日本思想体系7〉『往生伝 法華験記』(岩波書店/一九七四年九月)。

- (11) 井上光貞・大曾根章介校注〈日本思想体系7〉『往生伝 法華験記』（岩波書店／一九七四年九月）。
- (12) 「にゅう・めつ」【入滅】（『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ
<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002033870b6zw0hHEj9>（二〇一七年一月一三日閲覧））。
- (13) 勝浦令子「古代における母性と仏教」（『女の信心——妻が出家した時代——』（平凡社／一九九五年五月））。
- (14) 永井和子「源氏物語の老人——横川の僧都の母尼君」（『源氏物語の老い』（笠間書院／一九九五年五月））。
- (15) (4) に同じ。
- (16) 小林とし子「第一部 翁と媼の源氏物語 第一章 媼の鬼——隠された女系の世界」（『翁と媼の源氏物語』（笠間書院／二〇一二年二月））。
- (17) 〈母〉系統は、「母」⑥「手習」二七九頁、同「夢浮橋」三七六頁、「母の尼君」（同二七九頁）、「親」（同二七九、二八八、二九〇頁）、「母の御方」（同三三四頁）、「なにがしが母なる朽尼」⑥「夢浮橋」三七四頁「母の尼」⑥「夢浮橋」三七五頁の九例。〈尼〉系統は、「尼君」⑥「手習」二九〇、三三〇頁、「大尼君」（同三二八、三五六頁）の四例。〈老人〉系統は「老人」⑥「手習」二九〇、三三二、三三九頁、「老人の御方」（同三二八頁）の三例。その他、「この主」⑥「手習」三〇〇頁、「媼」（同三三〇頁）、「いびきの人」（同三三二頁）で、いずれも一例ずつに留まる。
- (18) 第十七卷「産女行うぶめみやま南山科みやまにしや值鬼ぢき逃語にげご第十五」では、「官仕シケル若キ女」で、「夫モ無クテ懐妊」した女が、産んだらその子を捨てようと考え山莊へ赴いた。そこには「老おいタル女をんなノ白髪しらがみ生タル」媼がいた。女は媼に頼み込んで、その山莊にて子を産んだ。数日後、女は夢うつつに、媼が子を見て「ただ一口に（食つてしまいたい）」と言ったように聞いてしまう。女は媼が鬼であると思ひ、このまま居ては食われてしまうと案じ、逃げ出すのであった。この説話の終結には、古びた家には必ず鬼のようなものが住んでいるので、この媼も鬼であったのだとまとめられている。
- (19) 葛錦正一「宇治十帖論のために——浮舟と食われること——」（新潟大学文学部国文学会編『新潟大学国文学誌』第三十号（一九八七年三月））。
- (20) 松井友「日本人の深層を垣間見る『桃太郎』（『昔話とこのころの自立』（教文館／二〇一三年九月））。
- (21) 伊勢光「物語における脅威としての地方／受領——伊予介と常陸介を中心に」（『源氏物語（読み）の交響』（新典社／二〇

一四年九月)。

(22) 空蟬は源氏と関係を持ったことに対し、『いとかくうき身のほど定まらぬありしなごらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて、見直したまふ後瀬のちせをも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮かりなるうき寝のほどを思ひはべるに、たくひなく思うたまへまどはるるなり』(①「帚木」一〇二頁)と述べ、後妻の身となる前に逢瀬を重ねていたら源氏の扱いも違っていたらうと慨嘆する。また、中将の君も「げにこよなの身のほどやと悲しく思ふ。ただ、この御方のことを思ふゆゑにぞ、おのれも人々しくならまほしくおぼえける。まして、正身さうじみをなほほしくやつして見むことは、いみじくあたらしう思ひなりぬ。」(⑥「東屋」五八頁)と、受領の後妻となった身を嘆きつつ、人並みの身分に羨望する。

(文化創造研究科博士前期課程二年)